

田口武史（独文学）

R.Z. ベッカーの民衆啓蒙運動
——思想的展開と文学史的意義——

論文審査結果の要旨

本論文は、R.Z.ベッカー（1752-1822）を考察の中心に据えながら、ドイツ啓蒙主義末期に起こった「民衆啓蒙運動」の思想的展開と文学史的意義を検証した論攷である。

十八世紀から十九世紀にかけてのドイツでは、<Volk>という語の主たる意味が「下層民／庶民」から「民衆」へ、更には「国民／民族」へと変化した。従来の見解は、フランスによる祖国支配に反発したドイツ・ロマン派によってこうした変化が引き起こされた、と説明する。これに対して本論文は、当時ベストセラーとなったベッカーの主著『農民のための救難便覧』（1788）など数多くの資料を渉猟しながら、民衆啓蒙運動が<Volk>概念の変化において決定的な役割を果たしたことを明らかにした。

本論第一部によれば、ベッカーの出世作であるプロイセン・アカデミー懸賞受賞論文「何らかの欺瞞が民にとって有益でありうるか、という問いへの回答」（1780）が<啓蒙とは何か>をめぐる一連の論争を引き起こし、結果的には、「ベルリン水曜会」と「ベルリン月報」において啓蒙家の自己省察を促す。

本論文の主要部である第二部では、啓蒙主義の<Volk>観が民衆啓蒙運動を介してロマン主義の<Volk>観へと至る道程が明らかにされる。ベッカーは当初、農民の生活改善を図る『農民啓蒙試論』（1785）と『農民のための救難便覧』の中で、いわば<下からの啓蒙>の担い手として農民に期待をかけ、近代的な知識に毒されていない無垢な状態を<Volk>に認めていたが、しかし、フランス革命以降は、敵国に対抗する「ドイツ国民」としての<Volk>がベッカーの言説に次第に目立つようになり、民衆啓蒙運動の目的そのものが公共福祉から治安維持へと変質していくのであった。

第三部は、民衆啓蒙運動の後史として、ロマン派による民衆文学賛美を取り扱う。民衆啓蒙運動をほとんど顧慮してこなかったこれまでの民衆（伝承）文学研究に対して、本論文は、啓蒙主義とロマン主義との分水嶺に位置するヨーゼフ・ゲレスの『ドイツ民衆本集』（1807）に民衆啓蒙運動に対するロマン派の批判的受容を確認し、更に、グリム兄弟と A.v.アルニムの間で繰り広げられた「自然ポエジー論争」とグリム兄弟によって編纂された『子どもと家庭のメールヒェン集』（1812-22）の検証を通して、ロマン派の民衆文学概念に民衆啓蒙運動の痕跡を指摘する。

以上のとおり、本論文は、これまでの啓蒙主義研究でもロマン主義研究でもほとんど注目されてこなかったベッカーの民衆啓蒙運動を、膨大な資料を丁寧に繙きながら、ドイツの社会思想史ならびに文学史に内外で初めて位置づける画期的な労作に他ならない。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつことを認める。